

語り手

青山 あおやま

郁代さん いくよ



景福寺

姫路市景福寺前

## 生まれは駅前

私は御幸通りで生まれました。三井住友銀行がありますでしょ。あの前の方で生まれました。私たち姉弟六人なんです。長女です。私のところの仕事はね、お菊皿せんべい言うてね、お煎餅屋さんやったんです。玉椿とお菊皿せんべいとだけが今の男山の文学館のあるところ、あそこ市民寮いうてたんですね。その前は賀陽宮さんの別荘があったんです。そこへ納められるお菓子やったんです。隣の東呉服町に隠居がありましたね。昼間は躰巖しいおばあちゃんと私と弟とでお手伝いのおばさんとおって、夜になると職人さん帰ってくるんですね。私はその職人さんに銭湯へ連れて行ってもらってました。男の人がぬれたタオルをびしょとしたらばしと音がするんですね。そしたらねそれで私もふけ言うてくれる。ベチャベチャのはずのタオルがね、水分が飛んでるんですね。それがまたかっこいいんですよ。いくら真似をしてみてもうまくいかないんです。

## 女学校進学

城巽（じょうそん）小学校六年生で受験して女学校いったんです。テストは口頭試問でした。当時県立女学校いうたんですけれどね。今の東校ですね。男の人は姫路中学いうところに、今の西高ですね。六年生で皆受験しました。戦時中でしたんで電気をつけると敵機が来て爆弾を落とすので、電気の傘を風呂敷で包んでその下で毎日十二時まで勉強しました。

川西いう航空機製造してる会社が学校のすぐそばにありましたね。東側に川がありましたすぐその向こうにありました。その部品をどうやら上級生たちは学校の中で作ってたようです。だけど私どもは見学させてもらえなかった。秘密のことですからね。先輩からも

なんにも何をしてるかも聞いたことありませんでした。ひどい時代でしたですね。空襲警報になるからということ、私はうちへ飛んで帰ったんですけど、あの川西が空襲にあっただってということ、あわてて学校行ったんですね。そしたらもう学校焼けてしまってた。昭和二十年六月二十二日でした。

## 自宅が焼失

学校が焼けて、まだ一ヶ月もしないのに空襲で家が焼けました。七月三日でした。御幸通り二階町あの辺も全部が、旧市内が焼けてしまいました。一番初め照明弾が落ちたんです。姫路中がお昼みたいに明るくなりました。みゆき通りを走ってみんな逃げまして、今の城南広場行きました。あちこち火が燃えてるところで静かに待って。

一年生の七月に家が焼けて八月十五日に終戦。次の年の二月に台湾の方行ってた父親が復員してきました。それまで兄弟五人と中風のおばあちゃんですけどね、今中風言わないね。脳梗塞やね。そのおばあちゃんと母親とだけで父親が帰るのを待ちましたですね。

食べるものがない時代でしたので、長女ですから、いつも食べ物があるかな、みんな食べられるかな、足りなかったら自分が辛抱しようという状態ですと戦中戦後の大変なとき過ごしてきましたので、その気持ちはいまだに忘れないですねえ。母親と私の着物が全部お米に変わりました

当時は家を建てるのが大変なことで、焼け野原の中に立つんですけれど。神埼組、今でもありますけど、神埼組が一律に同じような家を建てていくんです。御幸通りですのに、商売人のうちですのに、同じような三間ほどの家が建つんですね。順番で今日は柱、今日は壁とか。みゆき通りに向かって窓があるんですね。その窓が入ってもガラスとか入らないんですね。順番ですからそれで荒板でご存じかな。薄い木の板で削ってない板です。そ

れをどこかから子供達がひらってきてね。それを窓に打ち付けて、その間の隙間を新聞を貼ってそれでやっと二十年十二月にその家入ったんですね。家族七人でね。そして父が二十一年二月に帰ってきて十二月に一番下の弟ができました。どうしようってあたしの母が相談したらおばあちゃんが

「授かったものやからその子はその分を持って生まれてくるから。だからその子が生まれたからって皆が食べんとおるといふことはないと思うからね。そやから産みなさい」  
って、言ったんですね。いつも思ひ出すんですね。その子の分を持って生まれてくる。

昭和二十三年に隣のやまとやしきが火事で、小さい家の中を消防のホースが十一本も通りました。家財道具も衣装も全部火事場どろぼうにとられてしまつて大事な制服も無くなりました。

## 校舎のない女学校生活

私達は姫路中学とか青年学校や工業学校や城北小学校を間借りして勉強しました。私ども今の西校へも行ききました。共学と違いますが校庭が半分に分かれてしまつてまして。線が引いたつてあつてですね。ボールが入つても取りに行つたらいかんです。男の人が投げ返してくれるという状態で過ごしました。

三年の時ですかね、今の東高へきましたのが。兵器庫の跡でした。男の子も女の子もジャンケンで半分に分かれました。半分姫路中学から来ました。門からずっと両脇にシュツと並んで男の人迎えました。でも、ものすごく無念のような感じでした。ニコリともしない。とにかくブスとしたまま入つて来ました。非常にいやだったんだと思います。それぐらゐのプライドを持つつてでした。

昔は凄いいプライドがあつて男の人は。女もまあそれなりにあつたんですけれどね。でも

男の人の全然違ってましたね。何十年も経って悔しかっただろうなあとだんだん思っ  
てあげられる。とにかく共学になってから男女一緒のクラスになりましたね。そしたらね  
もうその男の人たちの知識すごかったです。すごい勉強しておられ何でも知っておられ  
ました。それで何を聞いても全部教えて下さった。知らないことがないぐらい。すごい優  
しいんです。賢くて優しいんです。お掃除する二階へ水を持って上がるときそっと持って  
くれるし。もうそれは紳士的でかきこかったんです。だから男の人は賢いもの優しいもの  
カ持ちと、その時しみ込みました。

## 大学へこっそり通う

当時は女子はほとんどが就職をしました。男の人は大勢大学へ行きました。その辺の差  
がすごかったですね。女は銀行とか新日鉄にたくさん行きました。私は大学へ行かしてほ  
しくて。父親が「女賢しゅうして国を滅ぼす」いう人だったんです。私の母は結婚すると  
きに桐のたんすの中に内緒のように本を詰めてきてました。すごい本が好きだったんで  
しょうね。だから私が大学に行きたいって言った時には全然反対しませんでした。

父親には神戸の方の洋裁学校に行かして、言ったんです。当時は就職をしない子はお稽  
古ごとをしたんです。洋裁は女としてのお稽古ごとですからね。父親にたずねましたら、  
それはいいと言いました。それで大学は武庫川へ行きました。家から通える所で一番遠い  
学校が武庫川だったんです。ちょっとでも遠いところ行きたかったんです。不良でしょ。  
教職の資格をとりなさい、言われて、教職の資格取りました。

それから次はお稽古ごとですね。お茶やお花、和裁や洋裁。お料理はね五軒邸にキリス  
ト教の教会ありましてね。和裁も五郎右衛門屋敷に行きましたし、とにかく女としてのこ  
とばかりしてましたですね。学校は卒業したけど、やっぱり神戸の方にも行きたいでしょ。

それで英文タイプを習いにね。英文タイプを一生懸命するんじゃないくて、都会の方に行きたかったというか、空気に触れたかったというかね。

## 城の南から城の西へ

そのあと結婚なんですけどね。私二十三でここに来たんですけど、当時二十三は行き遅れなんです。みんな二十歳ぐらいで結婚してた。私は学校行ったせいもありますし、お稽古ごともしてたんで、遅れてたんですね。いろいろとお話をたくさんいただいたんですね。それとお寺ばかり三件続いたんですね。

父の従兄で姫路藩の士族・境野（さかいの）の娘が景福寺の檀家でしたので、その人のお世話で、お見合いをここ、景福寺でしたんです。忘れもしませんけどね二月二日だったんです。廊下が板だったんです。今畳になってます。玄関上がってね、父と仲人さんと三人で歩くんですけどね、もう齒がカチカチ、カチカチなってね、止まらないんです、寒くて寒くて。これは人間の住むところと違うと思ってるね。こんな所は絶対断ると思ってるね。

それで方丈さん、住職さんの部屋行ったんですね。そこにいる人がね、私に教えてくださった先生のお話のようにお寺さんらしい人だったんです。お寺さんそのものが座とっていう感じ。若いのにね綿入れの甚兵衛さん、襟がついたのを着ていて。火鉢が一つだけあってね。鉄瓶がシュンシュンしてて、その前座とってったんですね。その人が私の相手やっただんです。そんな時は齒がカチカチなってるのも忘れて、お寺さんらしい人やあと、そう思ってたんですね。二月二日にお見合いして、四月二十八日に結婚しました。

で、ここへ来ましたね。仁王門から入ってきたお嫁さんは私が初めてだったんです。それまではここのお寺はお城のお殿さんのお寺で雲水さんがたくさん修行してまして、今の私の主人のお父さんは雲水さんたちを教育する人やったんです。ほとんど神崎郡加古川と

か岡山の人が多かったようです。

## 本堂の火事

昭和三十一年に結婚して三十五年に本堂が焼けました。不審火です。原因は消防の人に聞いたんです。そしたらね、炭化深度でご存じですか。焼けた後に立っている柱を突き刺してみます。ぐるりから。一番深いところが炭化深度が深いんですね。どこから焼けたかがわかる。それが裏からだったんです。裏にね私も入ったことない暗い部屋が二つほどありました。そこに浮浪者が入って寝よったと思うんです。で寝タバコの火だと思いません。

夜中にパチパチいう小さい音がするんです。おかしいと思って、入口の戸を少し開けたんですね。本堂がおかしいのと違うかと。ほしたら真っ暗の中でパチパチ音がしてるんです。そのままあわてて何もわからないから何かおかしいと思って飛んでもどったんです。とにかく着るものを寝巻ですから替えないといけないというので、三月二十六日ですから寒いんですね。着替えてこっちきたらもうその玄関まで火が、ばあっと、メラメラと出てました。それからすぐに消防に電話したんですけど消防が放水するまでに二十五分かかりました。街がせまいから消防車が入らへんのです。火がメラメラと出てきてるところへね、住職がね飛んで入ろうとしたんです。そのとき私がぐって手を引っ張ってね。「方丈さん、命さえあればなんとかなる。」それが何回も火事にあっている体験だと思えます。要するに命さえあれば何とかかなるという感じでした。

三十七年に再築されました。方丈さんは雪の日もわら草鞋を履いて雲水の笠をかぶって托鉢にまわりました。私はもうできるだけ質素な生活をしました。とにかく本堂が建ちました。

## 資金難のなか保育園を建てる

住職がこれだけの環境を子供たちに与えたいと思いだしたんです。お寺やからといってお年寄りとかそういう方が来られるのを待っただけではなくてそれはもったいない。この空気を子供に吸わさんといかんと。一番大事な時期にね。大きい人間を造ろうというのが住職の一番の目的で坐禅をしたり合掌をして一日過ごさそうと。

四十年に保育園を作ろうかというお話が出たときに私が妊娠したんです。それで私が十年も経って自分の子供ができるのにね、人さんの子供預かるようなそんな大変な仕事はねできなうと言ったんです。そしたらね男の夢をつぶす氣か言われたんです。

本堂が建ったばかりですからお金がなかったんです。方丈さん全然関心ない人で、銀行にお金貸してもらおう思ったら担保がないとダメでしょう。それで坪田の大江さんに来てもらって、「ねえ坪田さん、すいませんけど保育園建てたい」というてんです。方丈さんは「お金が足りませんから、銀行にお金を貸してくれ言うたらね、銀行が担保出せいうんですわ。ワシが判押すいうのに」言うてんですよ。あたしが横から「当たり前ですわね」って言ったんです。ほしたら坪田さんがね、「わしはその方丈さんのそいうところが好きです。分かりました。なんぼありますか」初めてきかれたんです。「百五十万しかないんです」「分かりました。それで建てます」言うたったんです。今の保育園のところはね基礎を作ったんですね。

今の建物にするとき、昭和六十一年です。そのお世話になった坪田工務店へ指名しました。金額は問わない。おたくが建ててくれたったそれでもう私らのところは満足やからって。



## 保育園はじまる

保育園します皆さんにお話ししたらね申し込みが七十人来たんです。そのとき改めて景福寺って凄いなと思いました。小さい子供預けるのに信用しないと来られないでしょう。

私ね学校の先生の資格を取ったものですからね、幼稚園の資格を取ってないんですよ。今は保育士いますけど保母資格言うてました。私は持ってないからできない。それも反対の理由だったん。そしたら「いやいやその資格持ってる人に来てもらって手伝ってもらったらいんや。これは佛さんの仕事やから。」ああ、やっぱり男の人は偉いなそこで思いましたね。すぐ公立幼稚園八年経験いう先生が来てくれましたね。その人が全部してくれまして。私も毎日来ましたよ。お陰様で早や五十年過ぎました。子供たちは自分の身体の中に心という一番大切な臓器があると信じています。成功です。先生方に感謝です。



## 聞き手 米谷 拓哉

姫路生まれのお城っこ。現在（二〇一八年）大学を休学し起業しようとしています。播州弁をしゃべれるようになろうとがんばり中。  
まだまだ聞き足りないところが多いなあと今回の聞き書きでは痛感しました。ただ、この人はどんな風に人生を歩んできたのかと記録することは楽しい。今後、自分の興味ある海外で聞き書きをやりたいなと思います。